

ビルマ戦線からの生還

中山 勇 鹿沼市

私は昭和十八年4月10日、宇都宮の師団通信隊東部第四十三部隊に現役兵（制度上、平時から軍に属している兵。これに対して有事に召集される兵が予備役兵）として入隊しました。20歳でした。その頃は戦争真っ只中で、フィリピンでの戦争も含め悪戦苦闘していた、そういうさなかでした。軍隊に入るとまず、一期の検閲といって3カ月間の基本的な戦闘訓練や生活の環境整備など、全部そこで教育を受けました。現在ではそこは警察学校になっています。

●シンガポールで戦争の恐ろしさを実感する

昭和十八年の7月、広島の宇品港から4千トンのラスの貨物船に乗り、駆逐艦2隻の警備を受けながら、敵の潜水艦あるいは飛行機



がたびたび襲来してくるなかを、かろうじて台湾、仏印（フランス領インドシナ）、シンガポールに寄港しました。シンガポールではちようど日本が戦勝し、山下奉文とイギリスの司令官パーシバルの会見が行われ、あの有名な、「イエスカ、ノーか？」の会談を行った所です（注：パーシバルに対して陸軍大将の山下が降伏するか、しないかを迫った時の逸話）。ところがパーシバルは降伏せずに、戦争が続きます。どちらかというとイギリスのほうから日本に対し「降伏しろ」という話があったようですが。

日本軍が南方へ進出して中国に圧勝し、仏印、タイにも勝利し、あのシンガポール要塞は、アメリカだけでなくイギリスの重要な軍事基点でありました。その軍事基点を肉弾戦でもって陥落させたのです。その攻略してまもない半年ぐらい後に、私たちが3日間寄港しました。軍艦が沈没していて、戦車がごろごろ転がっていた、シンガポール攻略がいかに苦しい戦争であったかわかります。そして戦場はこんなに恐ろしいところかと、そこで初めて実感したのです。

●ビルマに上陸

それからまた船に乗り継いで約20日間、たまたみ1畳に4人の兵隊が寝起きするという、「すし詰め」以上の輸送船でした。なにしろ貨物船

ですから、船倉はうす暗くて、毎日汗まみれ、眠れないような状態での生活でした。やっとビルマ（現在のミャンマー）のラングーン（現在のヤンゴン）に上陸しました。現在ではアウンサンスーチーさんが民主化の運動にだいぶ活躍して、軍政から民政へ移っているようですから、これからは明るい平和なビルマ、ミャンマーに生まれ変わるのではないかと思います。

さて、私が到着したころは、もうビルマの侵攻作戦が半分終わっていました。残すのはイギリスの拠点であるインパールでした。

そのインパールの攻撃のために編成された兵力はおおよそ9個師団、1師団が五千八百七千名です。私たちは弓兵団、第三十三師団。茨城、栃木、群馬の3県の出身者で編成された師団です。他の師団はたとえば九州師団では「菊兵団」というように、数字の番号は使わずに部隊名を知らされていました。「青葉兵団」だとか、「狼兵団」のように。

●インパール作戦に参加

ビルマのカローという地で約6カ月間、戦備を整えながら、集団して昭和十九年の3月、ビルマ最後の戦線、インパールに向かって開戦が行われることになりました。その開戦はウ号作戦。アイウエオのウです。3月7日に開始され

て、天長節（天皇誕生日のこと。4月29日）にはインパールを陥落するのだ、という軍の命令の下に突撃するわけですが、最初はさすがに意気高揚して、進め、進めで、だいぶ戦果を上げたのです。そのおかげで敵の戦車、自動車、食料、そういうものを戦利品として分捕りました。それらの立派な食糧品は「チャーチル（当時のイギリスの首相の名）給与」と呼んでいました。コンビーフがあり、バターがあり、乾パンがあり、チョコレート等々：あらゆるものが、不自由しない戦線の整備がイギリス軍にはなされていた。私らも勝ち戦で、敵が残っていたチャーチル給与を食べて、やがてインパールに入れば、どんなおいしいものが食べられるんだろうか、というような淡い気持ちを持ちながら戦闘を進めていきました。

●比較にならない敵の軍備

ところが、天長節間際の3月末から4月上旬にかけて、敵はインパールに70門の大砲を備えつけて、われわれが進んでくるのを待機していました。われわれ一般兵は、3月7日に出発、糧秣（兵員の食糧と軍馬のまぐさ）は3週間分しか持っていなかった。軍足といって、兵隊のはく長い靴下2本に玄米を詰めて、あとは乾パンだとか、コッペパンという小さいパンに金平糖が

入っている、その袋が3袋、それから調味料の味噌、しょうゆ。すべてが携帯口糧で、食べるといつても、かろうじて命をつなぐような食糧でした。

そのうちに、だんだん、だんだん兵力が衰えてきました。敵の軍備にはとても勝てないのです。たとえば日本の鉄砲は、いちいち装填して5発しか入りません。5発打てば、また5発入れて打つ。ところがイギリス連合軍の兵隊は、自動小銃で1回装填すれば20連発で弾が出るという、そういう状況です。戦車にしてもM4戦車というのは、鉄板の厚さが25〜30ミ。日本の戦車は15〜20ミ。日本の戦車隊は全部インパールの手前のロイ湖という湖のほとりで湿地帯にはまっけてしまつて、戦車がぜんぜん動かない。日本は野戦銃砲が2門で、それも分解して持つていつて敵に向かった。とても勝つ見込みはないのです。毎日、敵の戦場へ切り込み隊、あるいは特攻隊として選抜されて肉弾戦で行った人は、機銃掃射にやられて一人も帰れない、そういう状態でした。

私はインパールの約45㍎手前、ビシエンプールという所まで行きました。もうそこは最前線です。私は師団通信隊でしたから、通信機を背負いながら行くのですが、敵に線を遮断されて

しまった所を保線に行かねばなりません。すると、そこで保線隊を待ち構えていて、攻撃される。そういう状態で、敗戦、敗戦の毎日が続く。そのうえ、持つてきた食料が底をつき、木の実を食べたり、しまいには、馬を連れていったので、その馬料の硬い麦を炒って食べました。飼料を食べるわけですから、排便は血便になるくらいひどい状態になってしまったのです。

●マラリアにかかる

加えて、アラカン山脈の気象がきびしいものでした。インドのアッサム州といえば、世界でも屈指の雨量の多い場所です。大体7月から10月までが雨季で、太陽を見ることができないような悪天候が続きます。そこで私はマラリアにかかってしまいました。もう歩けなくなつて、担送患者として部隊の歩兵の人に担がれて、病院といつても、收容所みたいな所に着きました。軍医が一人か二人いるくらいの非常に貧弱な病院でした。次に、搬送する兵隊がいないので、歩ける者は歩きなさい、歩いて後方に退く以外に方法はないということになり、私も杖をつきながら歩き続けました。鉄砲や背囊（現在のリュックのようなもの）は全部捨てました。帯剣と雑囊（肩掛けカバン）と水筒だけをもって77㍎地点にある弓師団の第二野戦病院をめざしました。

やつと着いた野戦病院では、入院したとはいえず患者がいっぱい、もう幕舎がないのです。病気や負傷した人間が幕舎で手当てを受けるのですが、何千人という傷病兵たちがそこにいるのです。一日雨が降ると、30人、50人の死体が毎日出てくる。それを、穴を掘って、死んだ人をみんなそこへごろごろ埋めた：焼いている暇などありませんから。

●一つ目の幸運

私とその第二野戦病院にいたときに、大きな救いがありました。戦後、一緒に帰ってこられた加蘇村の小林さんは、私より年次が一年以上、5年くらい前に亡くなられましたが、この方が衛生兵としてそこにいたのです。「中山、鹿沼の出身だつてな」私の病床日誌を見てわかったんですね。「俺は加蘇村だ。鹿沼の上田町の材木屋へ仕事で行ったことがある。とにかく、がんばって生きて帰れ」と言ってくれました。その小林衛生兵の計らいで、塩沢という軍医が、私の病舎だけ毎日来てくれたのです。それで私は悪性のマラリアを何とか克服できて後方へ歩いて退却することができました。その病院で塩沢軍医と小林さんにお世話にならなければ、病死として、毎日死んでいく人間と一緒に死んでいったかもしれない。そこで私は命拾いをし

ました。

77歳から後方へ退くといつても、兵站地（へいたんち）軍の中継点。食糧や弾薬などの軍事物資を補給する機関）は大体200歳ぐらいあります。毎日、毎日雨が降る。やつとの思いで1日15、16歳、20歳歩けばましなほう。もちろん、歩いている道路めがけて敵の爆撃があります。道路にいたらみんな機銃掃射でやられてしまいますから道路から逃げますが、それが非常に大変でした。何しろ山の中ですから、2千呎の深さの谷があり、みんなその谷底を目指して一時しのぎをしました。

●昨日まで歩いていた人間が今日は死ぬ現実

あるとき、弓部隊の敗残兵たちが歩いていると、偶然出会った、菊沢の見野の大出さんと壬生の中村さんという人と一緒に、トンザンという所まで歩いてきた。ところが一緒に歩いていた大出さんが、「なんだか今日は山が見えない」と言うのです。実際には山が目の前にいっぱいあるのですが、栄養失調のため視力がなくなつたのです。あと30歳ぐらいで平坦地という所で、歩くことができなくなりました。そうしたら中村という兵隊は「何で歩けないんだ、今歩けなければ、敵兵はもうそこまで押してきているんだぞ、こんなところで倒れてどうする

んだ。今まで歩いてきたのは何のためだ」と、元気を出させるためだったのでしようが、そこで殴ったり、蹴ったりするのです。が、どうしても歩かない。そこで私は中村さんに言いました。「もういい。もうやめろ！ 私は同郷のもだから、もう今日はここで一緒に寝る」と言うと、中村さんは大出さんの戦友ですし、中隊も同じ、それで一人では行けなくなって、三人はそこで一晩泊まったのですが、その大出さんはその場所で死んでしまうんです。

昨日まで歩いていた人間が、一晩で死んでいく。栄養失調、あるいは病気がいかに進んでいくかわかると言います。その晩、同郷の人ですから、冷たくなつた大出さんの小指を切りました。煙が出ると、敵に居場所がわかってしまうので、煙の出ない枯れた竹枝を炊いて、焼いて遺骨を作った。「中村、これは戦友の骨だぞ」と言つて所属原隊に届けてくれるよう、頼みました。

今度は二人になつてしまつて、また歩き出しました。ホートワイトという所まで来て、もう少しで平らな場所に出るといふ手前に、兵站病院がありました。その兵站病院で、その中村もアメーバ赤痢とマラリアで亡くなりました。私一人で面倒を見ましたが、同じ中隊の仲間

が病院にいましたから、その兵隊に二人の遺骨を頼みました。

その後、私一人で兵站地を目指しましたが、周りはぞろぞろ、ぞろぞろ敗残兵が支えあつて道いっぱいでした。ようやく兵站地について、ああ、よかつた、これで何とか生きられるんじゃないかと思つて、気が緩んだのかもしれない。そこでマラリアを再発し、アメルバ赤痢にかかり、私も動けなくなつてしまいました。

●二つめの幸運

それからまもなく、私の部隊の衛生兵が同じ部隊の者を探しながらそこへやつて来たのです。「生きていたのか、中山！ 部隊はすぐそこにいるんだから、歩けるようになったら必ず部隊に寄るように」と言われました。

その晩、歩けなくなつて、衛生兵に注射やら薬をもらつていると、水戸の工兵隊の兵隊が、機材輸送のためにそこまで搬送に来ていて、私に「どこの兵隊だ」と尋ねるので、「師団通信隊の者だ」と答えると「俺は宇都宮の赤門前の〇〇だ。今夜この車でイエウ駐屯地まで帰るから、そこで部隊の医務室で休養しなさい」と親切に言ってくれました。その人の言うことには、近くの師団の施設（病院）に残つていても、傷病患者が多く医薬品もないし、毎日、砲爆撃が

続いている現状だとのこと。

おかげでイエウの工兵隊の医務室でお世話になり、命をとりとめる二つ目の幸運となりました。しかし、私が部隊に寄らずに後退したため、路上辺りで野垂れ死にしたにちがいないという事になつていたようです。

十分な休養を受け、歩けるようになり、マンガレーに着くことができました。しかし、マンガレーとメーカーラの平坦地に入つてもイギリスの激しい攻撃は続き、われわれは逃げて、逃げて、逃げて、やつとの思いでビルマの首都、ラングーンの陸軍病院に入った。

ここは従軍看護婦もたくさんいる大きな病院でした。病院には20日間くらいおりましたが、陸軍病院の衛生兵に、われわれ傷病兵は病気がなつて戦えない、役に立たない兵隊だと、悪態をつかれたことがあります。「こういう兵隊がいるから戦争に負けるんだ」と。

やがて戦況がだんだん不利になつて、ラングーン玉砕だ、ということになるのです。そこで急遽、ラングーン直轄部隊、駐在の商社マン、諜報機関員、病院の衛生兵、入院患者・傷病兵（歩ける者）、看護婦、民間人（50歳までの成人男子）を動員して、蘭部隊という旅団を編成して、ラングーン玉砕3日前に、脱出しました。

混成部隊の人たちは実戦の経験はなく、雨期の退路を求めてペグー山脈の山越えをすることになり、特に民間の人たちは難儀をするのです。女性は泣きながらの山越えでした。これが最後の敗残兵の行進となりました。

蘭部隊の終戦は8月15日ではありません。そのペグー山脈に入つて、9月の中ごろまで山中に隠れて、だいぶ敵の飛行機が飛ばなくなつたな、と思つていると、敗戦のビラがまかれてくる。『東京は全滅だ。あなたたちは早く降伏して祖国に帰りなさい』というビラが毎日のようにまかれるようになってきた。しかし、それは日本兵の戦闘意識を失わせるための敵の作戦だと思つていたのですが、事実、敗戦ということをもルメンという所に来て初めて知つた。それは9月15日でした。

●捕虜生活

その後、タイのナコンパトムという所で約1年2カ月の捕虜生活を強いられました。イギリスとオランダとグルカ（パキスタン）、その3国の連合軍の兵隊に捕虜としての監視をされ、屈辱的な経験をします。今まで捕虜であつた人間と立場が逆転するわけですから。

毎日私たちはムチで追われながら、長い棒にかついだ肥え桶を2棧も離れた山の中へ運ば

	兵力	戦没者
日本	328	191
イギリス	?	25

ビルマ戦争における日本とイギリスの兵力と死者数（千人）

あととみんな戦病死です。栃木311名のうち1万5千名がこの戦争で亡くなっています。帰ってきた7千294名は、現在では、おおかた亡くなって、もう千名くらいしか生きていないでしょう。大きな、大きな犠牲を払った戦争でした。

●いちばん多かった初年兵の犠牲

私は初年兵を3年6カ月やってきた一番最後の兵隊。初年兵は辛いというけれども、初年兵の犠牲者が一番多かったのです。というのは、古い兵隊の身の回りとかあるいは食事の世話とか、全部初年兵がやらなければならなかった。しかし初年兵は少なかったもので、私たちの1年上の兵隊まで一緒に上の兵隊を世話しました。ですから初年兵は辛かった。

私が復員後、17年ぶりに長野で行われた戦友会に行った時に、「初年兵は体力がなかったからたくさん死んだ」と言ってくる古い兵隊がいましたので、私は言いました。「あんたたちがこき使わなければ、あんなに犠牲は出なかつたぞ」と。私は宴席の酒も飲まずにその席を立てて自分の部屋に帰ってしまった。あとでその兵隊が私の部屋に謝りに来ました。私も兵隊から帰ってから2回、慰霊巡拝に行つてまいりました。インパールの付近は政情が悪くてそこまでは行けず、マンダレーのサガインヒルに、通信隊の生きて帰った人たちが資金を出し合つて慰霊塔を建立し、亡き戦友の英霊に対し、鎮魂を捧げてまいりました。

●戦争は、してはいけません

いずれにしても、戦争はしてはいけません。

戦争をしたらお互いに犠牲が出る。戦争に勝つたイギリスでさえもインパール作戦では1万5千名も死んでいるわけです。負傷者が2万5千名、これだけの人間の犠牲があつたインパール作戦、最後の戦いでした。戦争は決して起すしてはなりません。戦争は絶対に反対です。『ビルマの堅琴』とか、『聞けわだつみの声』は戦後作られた映画ですが、あれ以上、現実の戦場はひどかったです。白骨街道と言われるほどですから、インパール街道は。累々とした屍でした。昨日まで歩いてきた者が今日は死んでる。寝ているのかと思うと死んでいる。私は戦友を思うとき、あのととき、今の食料の半分でもいいからあつたなら、命を落とした戦友も生きて帰られたんじゃないか。私は毎日の食事をとるときには、いつもそんなことを考えて生活しております。



慰霊碑(サガインヒル)



日本人墓地(マンダレー)

*その後のエピソード

戦後、毎年のようにインパールから生還した仲間たちの戦友会が開かれていました。戦後42年たった一九八七年、イギリス人将校だったルイ・アレンさん（英軍の語学将校としてインパールで日本軍と戦った。戦後ダラム大学で教鞭をとり、インパール作戦に関する著書もある。91年没）が戦友会に招待され、宇都宮の護国神社で私たち元日本兵士と再会しました。25人くらいだったでしょうか、一人ひとりと笑顔で握手を交わしました。「昨日の敵は今日の友」です。彼は敵の将校ながら、紳士的、風格があつて立派だなあ、と思いました。また、彼はイギリス軍と最前線で戦った弓師団（宇都宮）の特に白虎部隊の粘り強い戦いを褒めていました。日本軍はよく戦つたと称賛していました。



かつての敵、アレンさん
1987年3月（護国神社で）

